

早稲田大学本庄高等学院 2012年度学校自己評価

はじめに

2012年4月、竣工なった新校舎での授業が始まった。また10月には創立30周年記念式典を挙行了。12年度は、1983年以来の30年の歴史の上に、本学院の新たな教育・研究活動が始まった年であった。現制度で5度目となる12年度の学校自己評価は、11年度と同様、まず各専任教員が、生徒による授業評価、保護者の本学院の教育に対するアンケート等を参照しつつ、授業、卒業論文、クラブ活動、研究活動等についての評価を行ない、さらに本学院内の教務室、各委員会、各学年、事務所等の部署がそれぞれの活動の評価を行なった。そしてその上で、学校評価運営委員会がそれらを理念・目的、教育活動、生徒、研究活動、教育研究施設、社会・大学との連携、管理運営の6項目にまとめ、さらに12年度の特殊事情として創立30周年記念事業の項目を立て、合計7項目について評価を行なった。本自己評価が13年度以降の教育・研究の改善に資することを望むものである。

I. 理念・目的

本学院は、早稲田大学での一貫した教育体系の中に位置づけられ、卒業生全員が早稲田大学の各学部に進学する規定になっている。本学院の教育はその前提の上に、知的関心を高め、論理的な思考力、豊かな感性を育成し、さらに大学における専門的な学問の分野も模索させ、また大学での幅広い本格的な学問研究に必要な基本的な学力・体力を養成することを目指している。

大学では、00年に「21世紀の教育グランドデザイン」、08年に「Waseda Next 125」、12年に「Waseda Vision 150」という大学全体の中長期的方向性を示しているが、そのなかで本学院も大学の一箇所として目指すべき将来像を示している。「Waseda Vision 150」に示された将来像は、地域の特色を生かした「森に想い土に親しむ」教育をいっそう発展させた「大久保山学」をテーマに、教科横断型の教育・研究活動を通して、社会の各分野で活躍できるリーダーを育成することである。この将来像は12年11月に公表されたのであるが、12年度の本学院の教育・研究活動はすでにそれに向けて展開された。

II. 教育活動

①授業

a. 必修科目

12年度は13年度から始まる新教育課程の理数科目の先行実施として、第1学年に生物基礎と化学基礎を新たに設置して、授業を展開した。授業は、11年度の生徒の授業評価等を分析・検討した上で計画が立てられたが、新校舎となり、全教室にIT機器とスクリーンが設置されたことから、各教員はそれらを活用した授業を行なった。

具体的には国語では映像資料や1次資料を用いた立体的な授業、第1学年の体育では授業の延長線上にダンス大会を催し、第2学年の化学では理系学部進学のための基礎の習得を視野に入れつつ、文科系学部志望者にも理解される授業、地理では東日本大震災を受けて自然地理分野に重点を置いた授業といった本学院ならではの授業を行なった。本学院の特徴でもある一般入試・I選抜・指定校推薦等の多様な入学形態、帰国生を始めとする入学までの経歴の大きな相違、それらを前提に授業を展開しているが、英語や数学では中学校までの学力の確認テスト、小テスト等を行なった上で個別に丁寧な指導するなどして対応した。

12年度に行なった新たな試みとしては第1学年の「数学I」と「英語I」のコラボレーション授業がある。数学のトピックに関する記事を英語で読み、それを英語で発表するというもので、生徒の理系への興味を向上させることができた。こうした教科を超えた関係は今後

の授業の一つの方向を示しているといえよう。

授業を展開していく中での問題点として、2時間連続授業と教員の出張による休講が挙げられる。2時間連続授業の日に出張が頻繁に入ると授業時間が確保できなくなるわけであるが、その対応は13年度以降の課題である。

b. 選択科目

第3学年の授業時間数の約半分が選択科目であり、生徒は7講座(14時間)を選択することになる。12年度に設置した講座数は、人間科学部提供のオンデマンド科目を含めて95であった。当初106講座が用意されたが、11講座は規定の受講生(S S H科目は5名以上、その他の科目は10名以上で開講、オンデマンド科目は規定なし)が集まらず、開講されなかった。逆に募集定員を大きく超える受講希望者が出たため、抽選で受講生を決めざるを得なかった科目も多くあった。その状況は11年度とほぼ同様であったが、生徒への広報の改善と生徒の希望がかなえられる体制の構築が必要であろう。

多くの選択科目は学部進学を見すえて授業を行なうことになるが、英語科目では学部レベルの力をつけることを目標とし、理系科目では理系学部で求められる学力の養成と個々の学問への興味喚起をはかった。また「複素関数論入門」は学部レベルの授業を行なった。一方「英語コミュニケーション」では、G I T Sの留学生を招くとともに卒業論文や修学旅行と関連させた内容を扱うなどの工夫を施し、「地理学演習」では教科書で大きくは取り上げられない社会問題を扱い、「早稲田大学と文学」では早稲田大学への意識を高めることを目標に授業を行なうなど、本学院ならではの授業も展開された。

なお英語での語彙不足の生徒が目立つこと、演習的授業を意図したにもかかわらず受講生が多くなって目的が達成できなかったこと等が問題として残った。

c. 卒業論文

原級生も含め314名が提出した。平均点は77.4点(100点満点)で、例年と大きな差はなかったが、最高点を得た者はいたものの学院賞受賞者はなく、特に秀でた論文がなかったことは残念である。

卒業論文のための時間が設定されていないなか、各教員は放課後や夏期・冬期の長期休暇中に個別指導を行ったりゼミを開催したが、教員と生徒の日程調整はかなり難しかった。それをEメールの利用である程度補ったが、指導体制の整備は課題である。

生徒の卒業論文に対する取り組み方の差は大きい。テーマ設定直後から実験を繰り返したり資料収集に奔走する者がいる一方、第3学年の夏休みまでクラブ活動に集中し、9月ころからようやく取りかかる生徒もいた。そうした取り組み方の相違は、当然のことながら結果に表れている。また教員に頼りがちな生徒が目についたことも12年度の特徴である。指導する際の生徒との距離の取り方を工夫する必要があるだろう。

論文提出後の口頭試問は義務とはされていないが、多くの教員は実施している。口頭試問の段階で一定時間教員と話す中で、初めて論文の意義を認識する生徒も多々見られ、その教育的効果は大きいといえよう。

11年度には剽窃が大きな問題となったが、各教員が論文リテラシーの指導を重視したこともあり、12年度は大きな問題とはならなかった。

d. 卒業論文報告会

2月20日(水)、第3学年の学部進学準備セミナーの期間に卒業論文報告会を開催した。報告会の目的は2つあり、1つは次年度に卒業論文を執筆する2年生に対して卒業論文を意識させ、できるだけ早い時期からの作業を促すことである。もう1つは論文とレポートとの違いを認識し、3年生の執筆過程を参考に、自ら研究計画を立てられるようにすることである。当日は、11年度と同様に、本学院生3名と慶應義塾湘南藤沢高等部生1名が報告し、また、慶應義塾湘南藤沢中高等部の杉山諭教諭から講評を受けた。

本学院側からの報告者3名は、進路指導委員会で選定した。その基準は、フィールドワークや実験・観察など自分でデータを集めた努力の成果がみられ、データで実証的に明らかに

する手続きが聞く生徒にとって理解しやすいもの、内容がプレゼンテーション向きであり、2年生が聴くに値する作品であるもの、また著者自身が真にそのテーマが好きで楽しんでいる様子が窺えるものであった。論理的思考の重要性や、身近な話題の中にも論文の題材となりうる事柄があることを示し、プレゼンテーションの際の様々な技法の参考にもなりうると考えた。例年は自然科学、人文科学、社会科学の各分野から、それぞれ1作品ずつ選出していたが、12年度はそれにとらわれることなく選出した結果、自然科学2件、社会科学2件（以上、本学院生）、人文科学1件（慶應生）という構成となった。報告会当日の会場の運営は政治経済部員に依頼し、司会は同部3年生が行なった。

最初の報告は河川の浄化に関するもので、データ収集の苦労や、理詰めで研究を進める態度がよく分かるものであった。2番目の報告は土方歳三に関するもので、著者の思い入れが強く反映され、調査に相当なエネルギーが注入されたであろうことが感じられた。3番目は慶應生の「男性声優が〈アイドル化〉しない理由」というもので、発表の技法なども含め非常に分かり易いものであった。最後は著者の趣味をとことん追求したもので、以前から興味があった電気自動車レースに関する研究であった。「おたく」と言われる領域に近く、何も考えずに好きなことを1年半かけて調べ上げたという印象であった。

今回の報告会で印象に残ったことは、聴衆からの質問が多かったことである。各報告に対して数件の質問があり、特に慶應生の報告については予定の時間を超過して質問時間に当てた程であった。静かに聞くだけでは学院生として物足りないが、今回の報告者と聴衆の間の節度をわきまえた礼儀正しい活発なやり取りは非常に好ましいものであった。

② 課外教育

a. 早慶野球戦観戦

6月2日（土）に東京六大学野球春季リーグ戦早慶1回戦を観戦した。毎年第1学年を対象として行なっている行事であるが、12年度は次の2つを目的とした。

① 早稲田大学への帰属意識を持つ。

② 同じ目的をもって応援することにより早稲田の学生としての絆を深める。

観戦に先立ち、5月31日（木）に大教室で集会を行ない、『東京六大学野球春季リーグ戦早慶戦応援要項』及び『早慶戦の歴史・資料』をもとに、早慶野球戦についての事前学習を行なった。

観戦当日は好天に恵まれ、絶好の野球観戦日和となった。本学院OBが選手として出場していたこともあり、生徒たちは懸命に応援し、熱気あふれる充実した時間を過ごした。事前学習も功を奏し、当初の目的は達成できたと思われる。

b. 体育祭

6月7日（木）に学校行事の一環として、体育行事实行委員の生徒が中心となり実施した。男女共学化以後、男女混合の8クラスとなって、格闘系の種目が少なくなってきたが、12年度は綱とりが廃止され、「台風の目リレー」を行なった。第2学年SSHクラスの女子の人数が少なく、種目と参加人数の調整に難航したが、クラスごとに各種目の参加人数を調整し、全員が1種目には必ず参加できるようにすることができた。運営においては、教員が前に出て指示するのではなく、できる限り実行委員の生徒が率先して行なうように指導したが、円滑に運営できたと思う。今後は、男女共学にふさわしい新しい種目を検討しながら、生徒にとってさらに価値ある行事としていくことが望まれる。

c. 人権教育

第3学年の修学旅行期間である10月3日（水）に、本庄市民文化会館において「ケータイ安全教室」NTTドコモあんしんインストラクターの佐藤由紀子氏を講師に人権教育講演会を開催した。携帯電話・インターネット利用に伴うトラブルや注意点について事例を挙げながらの講演で、身近な問題でもあり、生徒は熱心に聴いていたが、使用を間違えれば大きな犯罪にも結びつくことを改めて感じたと思われる。

d. 球技大会

第3学年の修学旅行期間の10月4日（木）に、第1・2学年で実施した。種目は男子はサッカー・ソフトボール、女子はバレーボールで、学年別・クラス対抗・全員参加方式で行なった。第2学年SSHクラスの女子が少ないため、生徒たちの希望でSSHクラスであるA組とH組の女子は合同チームを作り、第2学年女子のみ7チームのトーナメントで行なったが、特に問題はなかった。男子はサッカー部・野球部の協力で運営もスムーズに行なうことができたが、女子はバレーボール部がなため、体育科教員が審判を担当した。球技大会全体としては男女とも盛り上がり、クラスのまとまりも見られた。

e. 秋の学年行事

第3学年のが修学旅行期間中の10月5日（金）に、第1学年は信州小諸散策とぶどう狩りを行なった。好天に恵まれ、生徒は穏やかな信州の秋の1日を満喫し、クラスの親睦も深めることができた。

f. 稲稜祭

10月27日（土）・28日（日）に開催した。両日合わせた学外からの来場者は約2400人であった。運営は生徒会執行部（7人：会長・副会長・書記・会計）と稲稜祭実行委員会（48人）によって担われた。発表・展示は学院生企画・同窓会企画・生協食堂に分かれるが、そのうち学院生企画はクラス企画・公認団体企画・有志団体企画・校内装飾・モニュメント・大教室・屋外ステージ企画・共通棟体育室企画・寮生によるフリーマーケットで構成された。新校舎に移転したことによる混乱が予想されたが、実行委員長を中心に委員会がよくまとまり、成功したと言ってよい。

g. 芸術鑑賞教室

11月21日（水）に本庄市民文化会館において、本学院卒業生で男性ヴォーカルグループ「ゴスペラーズ」のメンバーである安岡優氏による音楽を鑑賞した。同氏は学院生時代の話を変えながら、すばらしい歌声を聞かせ、学院生にとって大変良い刺激となった。

h. マラソン大会

12月15日（土）に行なった。10年度は新校舎建築工事のため中止、11年度は距離を短縮する形で行なったが、12年度は新校舎も完成し、09年度と同じ距離に戻して開催することができた。男子と女子のスタート時間をずらしたが、ゴール地点で男子の上位群と女子の後方集団が重なってしまい、ゴールの記録と順位カード渡しで混乱した。なお、本庄早稲田駅南の道路に信号ができ、その地点を横断しなければならない状況になったが、当該地点の通過には今後さらに検討が必要であろう。

i. 課外講義

12年度は課外講義の一層の充実を企図した。例年のように、第1学年には「心の健康について」、第2学年には「喫煙・飲酒・薬物乱用予防について」、第3学年には「セクシャルヘルス・エイズ・性感染症予防について」の健康教育講演会を実施した。また、サマーセミナー・学部説明会・ウインターセミナー、さらにSSHプログラムによる課外講義を実施した。SSH特別講義としては「科学の最前線『超伝導』を体験してみよう」と「車社会は如何に人間に近づけるか？ーセンサー技術と人工知能を駆使した自動車の現在と未来ー」を行なったが、それぞれ生徒18名、23名が参加した。また、第3学年選択科目の物理と数学の上級選択者10名を対象に「量子力学とその方程式」の講義を行なった。

③課外活動

a. 生徒会活動

生徒会の主な活動は、生徒会予算作成、諸活動の企画・運営であるが、具体的には生徒総会の開催、国内外交流プログラムへの参加であった。本学院で例年実施している行事や取り

組みに対しての運営力は十分に備わっている。12年度の執行委員、特に1年生は積極的に生徒会活動に関わろうとする姿勢が見られた。教員の関与は最小限にとどめ、自主的な生徒会活動が展開されるよう指導した。今後も、さらに自主的な生徒会活動が展開されるような指導が必要である。

b. クラブ活動

11年度と同様、文化部門25、体育部門17のクラブが活動した。クラブの活動目的は心身の成長を目指すもの、より上位の大会での成果を目指すもの、稲稜祭での発表に力を注ぐもの、部員の親睦を図るものなど異なるが、各クラブはその目的によって活発に活動した。

大会での上位の成績を目指すクラブの12年度の主な成績は次の通りである。

映画制作	「映画甲子園」環境部門（ショートムービー）最優秀作品賞受賞
落語研究会	「漫才甲子園」受賞
陸上	関東大会出場（個人）
サッカー	埼玉県大会出場
ソフトテニス	関東大会出場（男女個人）
硬式野球	埼玉県大会1回戦
剣道	埼玉県大会個人ベスト8
スキー	全国大会（男女個人）

学内や地域での活動を主な目的とするクラブの12年度の主な活動は次の通りである。

グリークラブ	本当に歌いたい歌を歌う
ブラスバンド	自分たちで音楽を作り、楽しむ
E S S	稲稜祭チャリティーセールで福島の小中学生を支援するNPOに寄付
EMANON	部員の親睦をはかる
数学研究会	難しい内容に取り組む
昔、男ありけり会	『伊勢物語』影印本輪読会・合宿
化学	ダイヤモンドの合成
演劇	稲稜祭公演
茶道	稲稜祭茶席
バレーボール	感謝・感動・成長を目標とする
体操	体作り、色々な技への挑戦
応援	精神的な成長を求める

④ 国外交流

a. 修学旅行

12年度の修学旅行は、予定では北京・台湾・韓国の3コースであったが、国際情勢の変化により北京コースが中止となり、台湾コースに切り替えられた。実施直前の変更だったため、多少の不安を覚えながらの出発となり、しかも結果的に台湾コースは200人ほどの大きな集団での台北・台中訪問となったものの、無事日程を消化することができた。韓国コースは当初の計画どおり実施することができた。両コースとも名所・旧跡を訪ねて日本との文化の違いや共通点などを肌で感じながらの5泊6日だったが、とりわけ交流相手と過ごした貴重な時間は生徒の今後の人生に大きなプラスになるものと思われる。東アジアの一員としての体験を13年度からの学部生活のさまざまな場面で活かしてほしいものである。

b. 他校との交流（SSHを除く）

4月5日（木）にNorthside College Preparatory High School（シカゴ）の生徒17名と教員3名が来校し、本学院のE S S部を中心とする生徒16名と歌や日本語スピーチなどをまじえた交流を行なった。また4月26日（木）には北京大学附属中学から体育を中心に8名の教員が来校し、体育の授業やクラブ活動などを視察した。

ジョグジャカルタ第2高校（インドネシア）とのフリーペーパープロジェクトを通しての交流は11年度に続き、12年度も行なわれ、8月に英語雑誌『FP』を発行した。なおこの交

流は、12年度もパナソニック教育財団の実践研究助成の対象となった。

修学旅行における交流は、北京コースが中止となったため北京大学附属中学との交流はできなかったが、台中第一高級中学（台湾）および安養外国語高等学校（韓国）との交流は12年度も行なわれ、生徒の大きな刺激となった。なお北京大学附属中学には12月28日（金）に学院長が訪問し、13年度以降の修学旅行の再開、交流の実施を確認した。

c. 海外プログラム（SSHを除く）

12年度に参加した海外プログラムは以下の通りである。

- 1) 8th International Senior High School Intelligent Ironman Creativity Contest
台湾教育部が主催し、台湾全土の高校生を対象として行なっている創造性養成のためのコンテストで、3日間で与えられた課題に取り組み、創造性・体力・知力が問われる。03年より開始され、05年から数か国を招いての国際大会となった。本学院は台湾政府の招待を受け、第1回から参加している。第8回目となる12年度は7月26日～8月2日の日程で開催され、生徒6名が参加し、パフォーマンス部門で3位の成績を得た。
- 2) World Youth Meeting 2013
日本福祉大学主催の国際プレゼンテーションイベントで、本学院からは毎年参加している。9回目になる12年度は生徒3名が参加し、ジョグジャカルタ第2高校と協働発表を行なった。
- 3) 日韓高校生交流キャンプ
日韓経済協会が主催する文化や観光をテーマに市場調査やビジネスプランを作成・発表するプログラムで、生徒2名が参加した。

d. 留学

7月にスイスからのAFS留学生1名が1年間の留学を終了し、帰国した。それと入れ違いに、9月に中国からのAFS留学生1名が来日し、13年7月まで留学の予定である。

一方、本学院から11年9月からAFSのプログラムでスペインに留学していた生徒1名が、9月から復学した。

11年度から連続して留学生を迎え、また本学院からの留学も続いている。生徒の長期留学の継続化は評価すべきであろう。

⑤ SSH（スーパーサイエンスハイスクール）

本学院は02年（SSH元年）にSSH制度開始とともにその指定を受け、以後、05年に再指定、10年に再再指定されて現在に至っており、全国のSSH校の中で最古参である。12年度実施した主なプログラムは以下の通りである。

- 1) 河川調査プロジェクト
大学院創造理工学研究科社会環境工学科研究室・本庄市・NPO法人・埼玉県環境科学国際センターとの連携で行なう市内河川の水質改善活動であるが、12年度は、本庄市立藤田小学校との連携活動を開始し、同小学校の年間総合学習の講師を生徒が務めた。
- 2) Waseda-NJC (Singapore National Junior College) Exchange Program
7月に生徒10名をシンガポールに派遣し、シンガポール動物園やアートサイエンスミュージアムにおけるワークショップ、MJCの授業・実験等に参加した。また事前事後にテレビ会議も行なった。11月上旬にはNJCからの生徒・教員12名を本学院に受け入れ、科学未来館や科学技術館・富岡自然史博物館におけるワークショップ、オリンピック青少年センターにおける合宿交流、授業交流・文化交流・共同研究ミーティングなどを行なった。
- 3) SSH全国生徒研究発表会
8月7日～8日にパシフィコ横浜で開催された全国のSSH校の研究発表会に参加した。
- 4) 静岡北高校科学技術フォーラム（SKYSEF）
8月25日～29日にSSH校である静岡北高等学校主催の国際高校生学会に生徒4名が参加し、研究発表・課題研究・企業見学等を行なった。

- 5) 8th International Student Science Fair
4月29日～5月6日にカナダのマニトバ州ウイニペグで開催された、世界の科学教育に熱心な高校が参加する大規模な国際高校生学会である。本学院から生徒3名が参加し、研究発表・講義・ワークショップ・遠足・文化交流等を行なった。
- 6) 世界に通用する英語プレゼンター育成プロジェクト
SSH校である立命館高校のコアSSH事業であるが、本学院からは生徒2名が選抜された(全選抜生徒12名)。半年の間に、英語発音・プレゼンテーションデリバリエーション・プレゼンテーションスライドデザインの講義の他、韓国KSAとの合宿研修、台湾における発表練習等の訓練を行なった。
- 7) Japan Super Science Fair
11月9日～13日に立命館琵琶湖草津キャンパスで開催された立命館高等学校主催の大規模な国際高校生学会である。本学院から生徒4名が参加し、研究発表・課題コンペ・講義・遠足・文化交流等を行なった。内2名はNJCとの共同研究発表であった。
- 8) 白梅科学コンテスト
12月17日に小田原高等学校で開催されたが、生徒3名が招待参加し、研究発表を行なった。
- 9) 海洋開発研究機構研修
12月17日～19日に横須賀の海洋科学研究機構で深海の研修・水圧体験をし、講義を受けた。生徒20名が参加した。
- 10) 小笠原研修
8月26日～31日に生徒10名の参加により実施した。小笠原諸島の父島・母島で希少植物の調査、海洋生物の観察を行ない、自然保護区である南島においてワークショップ等を行なった。また、母島では小学生に向けて、子供科学教室を実施した。
- 11) 関東近県合同発表会
3月23日に西早稲田キャンパスで開催された東京都近辺のSSH校による合同生徒研究発表会であるが、12年度は参加校が大幅に増加した。3つのテーマに生徒6名が参加した。
- 12) 日本水産学会高校生セッション
3月28日に東京海洋大学で行なわれたポスターセッションで、生徒5名が参加した。
- 13) 1st Asia Pacific Conference of Young Scientists
インドネシア政府主催の高校生科学シンポジウムであるが、12年度はカリマンタン州パラカラヤで開催された。本学院からは3名の生徒が参加した。
- この他、「川の探検隊」への生徒講師派遣(1回)、子供科学教室の開催(6回)などの地域還元を行なった。

一方、SSH体制については文部科学省の中間評価が行なわれ、以下の6項目の指摘を受けた。

1. 学校全体の取組とするための現状分析と改善
2. 教員の意識や指導力を高めるための相互研鑽の取り組み
3. 理系進学者減の原因分析と対策
4. 生徒の課題研究における、生徒の視点からの探究活動の促進
5. 高大接続の取り組みの改善
6. 運営指導委員に教育改善に資する委員を入れること

それを受けて本学院では改善策を検討し、1・2・3・4については、「Waseda Vision 150」における本院の将来構想に連携させ、13年度からキャンパスを利用した総合的な取り組みである「大久保山学」の中で有機的に推進する体制を構築することとし、6については委員1名を増員した。また5については大学教務部と連携して具体的な方策の検討を開始した。

⑥高大一貫教育
a. 学部説明会

6月2日(土)に、大学キャンパスにおいて学部説明会を行なった。初めに2年生全員を対象に早稲田キャンパスで政治経済学部・国際教養学部・教育学部・法学部・商学部の説明を受け、その後、文科系学部志望者は戸山キャンパスで文化構想学部と文学部と説明を、理科系学部志望者は西早稲田キャンパスで基幹理工学部・創造理工学部・先進理工学部の説明を受けた。自分の進路を検討する際の参考になったと思われる。

9月26日(水)には本学院において、社会科学部の説明会を実施した。

10月5日(金)には所沢キャンパスにおいて、2年生全員を対象に学部説明会を行なった。スポーツ科学部・人間科学部の説明を受けたが、生徒は両学部の取り組みや特徴などを理解し、学部進学の実感がわいてきたように思われる。

b. サマーセミナー

7月17日(火)・18日(水)に開催した。参加者は1年生422名、2年生139名、3年生110名であった。13学部16名(政治経済学部3名、教育学部2名、その他は各1名)と学外から1名の講師を招き、18講座を開いた。11年度より3講座増加した。1年生の世論・広報委員2名ずつが各講義の司会・進行を担当したが、これは1年生に学院行事を広く知らせ、学部とのつながりを意識させる非常に良い機会となっている。それに対し、3年生に学部進学イメージを持ってもらうための行事でもあるにもかかわらず、3年生の参加者が少なかったことが問題点として挙げられる。講義内容が11年度・10年度とあまり変らない学部があること、野球部の試合の応援に行く生徒が多くいたこと等が原因として考えられる。サマーセミナーは自由参加であるので、生徒に対して参加を強制できないが、魅力的な講義の実施や、類似の講義は2年おきに行なうなどの改善を行ない、また生徒への事前の入念な告知が必要であろう。年度末の学部進学準備セミナーで各学部の模擬講義が行なわれなくなったことを考えると、サマーセミナーへの3年生の参加を増やすことが必要である。

c. 学部進学準備セミナー

2月22日(水)～24日(金)の3日間にわたって行なわれた。11年度と大きく異なる点は、学部から実施時期変更の強い要望が出されたことにより、各学術院教員による模擬講義が廃止されたことである。商学部の学部進学にあたっての課題を行なう時間を学院内企画として設けたことは11年度と同様である。また教育学部数学科と先進理工学部の一部の学科の課題に対しても個々に対応した。それにより生徒に計画的な作業と課題提出の重要性を理解させるとともに、教員も生徒の学習の進捗状況を把握することができた。なお進路指導委員ではない数学科の教員に生徒からの質問に対応してもらった。

本セミナーの目的は、学部進学への意識を高め、学部生活への円滑な移行を目指すことであるが、その意識は全ての生徒には浸透しているとは言い難く、教員が厳しく指導せざるを得ない状況もあった。

一方、講演の内容について必ずしも本セミナーに適していないものも含まれている。具体的には、学部の就職状況や就職活動についての講演やオープン教育センターの紹介であるが、この時期には必要最小限の情報を伝えた方が、生徒は聞き入るはずである。コースナビによる科目登録などの学部進学当初から必要な知識をメディアネットワークセンター(MNC)から講演してもらい、加えて学生生活の注意を学生部から、さらに本学院の最後の授業としての学院長講義を行なうのが適当であろう。就職情報やオープン教育センターの存在は学生部の講演に付け加えてもらえば十分で、あとは生徒それぞれに任せる方がよいのではないか。

生徒の感想としては、「イントロダクションのイントロダクションは不要」、「大学生活のフレッシュな感覚がなくなる」、「実際の所は自分自身で体験して判断していくしかない」、
「細かい注意は不要と思う」、「11年度の小グループに分かれての模擬講義の方がずっといい」などであった。大教室での講演ばかりでは本セミナーの本来の目的は達成できない。歴史的にも学術院教員による模擬講義が柱であったが、それが実施できなくなったのであるから、行事自体の抜本的な見直しが必要であろう。

以上のことから、13年度は大教室の講演を2つ減らすことを提案する。これに伴い期間も3日間から2日間に短縮すべきであろう。

なお12年度はこれまでなかった卒業生による講演を行なった。早稲田キャンパス・戸山キャンパス・西早稲田キャンパスからの合計3名の卒業生を迎えたが、「現役の学生の生の声が聴けて有意義であった」、「学部決定前に行なった方がよい」という意見が多数あった。

d. 学部開放科目

12年度は5講座に6名（2年生1名、3年生5名）が受講し、成績優秀とされる者も4名いた。大学キャンパスへの移動時間の関係で本科目への参加は、従来おおむね水曜日・土曜日の設置科目に限定されてきたが、12年度は木曜日の6限の講座の受講者もあった。オンデマンドによる受講が4名、夏季集中講座の受講は3名であった。大学キャンパスとの距離の問題はあるとしても、さらに多くの生徒が参加するよう、生徒への広報の充実を図る必要がある。

e. 人間科学部オンデマンド授業

人間科学学術院の協力により、第3学年の選択科目の一部として実施したオンデマンド授業には、12年度は計4科目に79名が履修した。大学生と同じ授業で専門性が高い内容であるが、興味深く受講する生徒も多かった。オンデマンドの授業に慣れていない生徒のなかには、教員が目の前にいないことで理解が難しいと感じる者もいる反面、自分のペースで何度でも繰り返し見ることができるメリットを感じている者もいた。「これまでに学んだことがなかった分野について、入門だけでも理解することができてよかった」、「卒業論文に関連付けられてよかった」という感想があったが、人間科学学術院の教員によるスクーリングの実施に限界があり、生徒の理解に差が出るという問題もあった。

全体的には効果を挙げた授業であるが、運用面やコンテンツ面での問題が顕在化してきたため、人間科学学術院と協議のうえ、13年度以降については廃止とすることにした。

⑦生徒指導

a. 生活指導

本学院は、入学定員320名という比較的小規模な学校であることのメリットを生かし、各教員が生徒との関わりを密接にもち、個々の生徒に目が行き届くような指導体制を心がけている。新校舎移転の初年度となった12年度は、以下の特に3点を目標とする指導を行なった。

1つめは、「本学院のよき伝統である自由な校風を維持していこう」ということ。自由を享受するためには、それ相応の自覚・良識に裏打ちされた規律が必要である。校則の少ない自由な校風を維持していくためには、各自が本学院生としての自覚を持つことが求められている。

2つめは、「早稲田の学生であることを自覚し、志や気概を持って行動しよう」ということ。多様なタイプの人が集う早稲田において、互いに切磋琢磨していけるように目標を高く据え、学識や徳行を深めていく。学識や徳行が深まれば深まるほど、その人柄や態度が謙虚になる。

3つめは、「他者を思いやり、仲間を大切にしよう」ということ。いじめや中傷といった他者を傷つけることはあってはならない。他者に対して謙虚であれば、思いやりの気持ちも生じる。他者へ自らの思いを遣わす「思いやり」の気持ちが、学院全体のマナー向上にもつながっていく。校則が少ない学院であっても、各人が思いやりをもって行動すれば、問題は生じないはずである。

集会などで、こうした心構えを生徒に説き、しっかりと実践するように促した。

上記の方針を実現するための具体的方策として、年間を通じてLHRで生徒へ継続的な指導を行なった。また、課外講義として学外の有識者や専門家による様々な講演を行ない、生徒への啓発を促した。そして教員組織としては、特に組主任は学年集団としてのまとまりを一層強固なものにすべく、学年集会等を通じて学年ごとに必要な生徒への指導を行なった。

12年度は生徒の問題行動による指導処置事例の件数は、1学期5件、2学期5件、3学期4件であった。内訳は、飲酒・喫煙1件、窃盗1件、暴力行為1件、定期試験でのカンニングや虚偽申告2件、インターネット・SNS上のトラブル2件、電車・スクールバスの不正

乗車に関するもの5件、修学旅行での規則違反2件であった。特にスクールバスでの不正乗車に関する事例が目立ち、学院のバスだという甘えがあることを感じた。この件を含め、指導目標が浸透していないと思われる事例が何件か起こったのは残念である。引き続き繰り返し訴えかけていくと同時に、状況に応じた個別指導を行なうことを課題としたい。また、12年度急速に普及したスマートフォンが影響した事例も見受けられ、新たな対策の必要性が感じられた。

盗難や遺失・紛失物については、正式に届けのあったもので51件であった。11年度の69件に比べて減少し、10年度の52件とほぼ同数となったが、新校舎となって教室移動が旧校舎よりも大幅に減ったことで、教室内の机に私物を放置してしまうことが以前に比べて増えている。貴重品はロッカーに入れて施錠するようにLHRや掲示等で繰り返し伝えてきたが、今後も継続して指導していく必要がある。

III. 生徒

① 生徒受入

a. 志願者

13年度入学試験の志願者総数は2491名で、12年度の2836名から345名(12.1%)の大幅な減少となってしまった。その大きな要因は、神奈川県立高校の入試日と女子の2次試験日が重なったことで、神奈川県的女子だけで12年度より109名減少した。しかしその要因を除いても減少は少なくなく、それへの対応を検討したい。

b. 入学試験

一般入試・帰国生入試・α選抜・I選抜の入学者数の次の通りである。

	男子	女子	合計
一般入試	100	44	144
帰国生入試	10	6	16
α選抜	62	31	93
I選抜	14	9	23
合計	186	90	276

合格者に対する入学者の割合、いわゆる手続率は、一般入試男子が24.4%、女子が38.8%、帰国生入試では男子26.3%、女子46.2%であった。帰国生入試の女子を除いていずれも12年度より若干低下したが、特に大きな変動は見られなかった。

c. 指定校推薦

地元指定校推薦と一般指定校推薦による入学者数は次の通りである。

	男子	女子	合計
地元指定校推薦	11	6	17
一般指定校推薦	12	17	29
合計	23	23	46

12年度入試より地元指定校推薦が1名、一般指定校推薦が4名、合計5名増加した。一般指定校推薦の男女比が11年度以前の状況に戻ったことが12年度との大きな相違である。

d. 入試広報

学校説明会としては本学院で開催した3回(7・9・11月)の説明会、大隈講堂での大学主催附属・系属7校の合同説明会(7月)、稲稜祭(10月)の他、出版社・学習塾等主催の国内20会場(23日)、国外2コース(8会場)の説明会に参加し、また6会場で資料参加した。個別相談を受け付けた会場での相談数は男子610名、女子336名で、募集定員に比して女子の割合が高い傾向は例年通りであった。今後検討すべきこととしては、志願者数の少ない地域の広報の方法であろう。

学校見学は随時受け入れたが、その数は34回69件であった。特に海外居住者のためには必要であるが、効率性からすると、一度の機会にできるだけ多くの見学者を集中させる工夫が

必要である。

②生徒への配慮

a. 奨学金

学内奨学金の募集は、春と秋の年2回に分けて行ない、学外奨学金の案内も含め、LHRや本学院のホームページを通じて生徒へ広く周知している。

奨学金のうち学内奨学金を受給している生徒は、春季募集14名、秋季募集17名の合計31名である。11年度に比べて1名減ではあるが、いわゆる「家計点」が高い、すなわち経済的に困窮度の高い家庭が多い傾向は変わっていない。

学外奨学金の状況は次の表の通りである。受給者の合計は38名であり、過去最多となった11年度に比べて10名減少したが、過去2番目の多さであり、学内奨学金と同様、経済的に厳しい状況が反映されている。

奨学院名		奨学生数
日本学生支援機構奨学金（学部進学後の支給予約）		13
地方公共団体奨学金	埼玉県	16
	東京都	1
	神奈川県	1
民間3団体奨学金		11
合計		38

また、授業料等軽減補助金を受けている者は、埼玉県82名、東京都36名であった。さらに就学支援金制度受給者は第1学年 340名、第2学年 345名、第3学年 305名で、合計 990名であった。この他に、東日本大震災による被災家庭対象の各種奨学金受給者が1名（学内・学外それぞれ1種を受給）いる。

b. 保健室

保健室は12年度学校保健安全計画に基づいて運営された。

保健教育としては第1学年「こころの健康」、第2学年「喫煙・飲酒・薬物乱用予防」、第3学年「エイズ・性感染症の予防」の健康教育講演を学外講師を招いて実施した。またAEDの使用法を中心とした教職員救急法講習を行なった。さらに保健の授業と連携して、「心肺蘇生法の実践」実習の際に、教材として保健室常備のAEDトレーナー・心肺蘇生法用ダミーを使用した。今後も心肺蘇生の知識習得・実践力養成に寄与したい。

保健管理として健康診断を行なった。生徒健康診断は新校舎では必要なスペースの確保が難しかったため、共通教室棟で実施した。診断結果は学校医と共有し、事後措置を徹底することができた。教職員の健康診断は、大会議室にて実施した。大学と連携して受診率の向上に努めた。また眼科・耳鼻咽喉科・歯科の学校医による健康相談を実施した。さらにクラブ活動でのスポーツ障害・外傷が頻繁にみられるため、整形外科医によるスポーツ障害相談を年2回実施した。今後も、多くの生徒・教職員にその機会を利用してもらうため、周知方法・実施時期・回数について検討することが必要である。

11月下旬から感染性胃腸炎、1月初旬からインフルエンザが流行したため、電光掲示板やLHRを活用して予防を徹底した。しかし、現在の出欠席管理方法であると、状況把握に時間を要することが大きな問題であり、検討を求めたい。

急な傷病で早退せざるを得ない生徒に対し、緊急にスクールバスを使うことができたことは幸いであった。

保健室には月曜日・木曜日は2名、その他の曜日は1名が勤務した。11年度までより校舎入口から近い利用しやすい場所になり、利用者は増加し、また精神面での不調など複雑で対応に時間を要するケースも増えている。生徒の多様なニーズに応えるため、2人勤務の日を増やすことが望まれる。

環境衛生については大学の環境安全管理課が担当した。

c. カウンセリング

水曜日と土曜日の午後、カウンセラー（臨床心理士）による相談を実施した。悩みを抱える生徒をカウンセリングにつなぎ、情報を共有しながら生徒の状況を把握したが、今後も相互に連携し、メンタルな問題を抱えた生徒をいち早く発見し、スムーズにサポート体制を構築する必要がある。

d. 共済見舞金

本学院では在学中の生徒の疾病・不慮の事故・災害等による医療費を相互扶助によって補助し、父母の経済的負担を少しでも軽減して安心して勉学に取り組むことができるようにするため、独自の共済制度を設けており、全生徒から年額5000円を徴収している。

12年度に請求申請があり、支給対象となった生徒は延べ 468人であったが、その実人数は 201人であり、おおよそ特定の生徒が繰り返し申請をしてくる傾向が強かった。総支払金額は 2,412,710円に達し、10年度・11年度の2倍近い支出となった。要因としては入院件数が10年度の延べ8人、11年度の延べ6人に比して、12年度は延べ28人と大幅に増加し、医療見舞金や入院見舞金が高額になったことが挙げられる。

e. 学校安全管理

本学院では、盗難や喫煙等の防止のために、さらには校舎内への不審者進入を防いで安全な学習環境を確保するために、教員日直制を敷いている。ただし、クラブ活動の終了時間との関連もあり、十分に機能しているとはいえない状況である。そこで校地のセキュリティについては、キャンパス管理室（太平ビルサービス）との連携がポイントとなる。特異なキャンパスの構造、すなわち、校門や学校の建物を外部と隔てる物理的障壁が存在しない中で、キャンパス内の数箇所に設置した防犯カメラとキャンパス管理室の警備員による巡回が大きな役割を果たしている。キャンパス管理室の警備は3名体制で、授業時は校舎内外の巡回、登下校時はキャンパス内通学路や生徒の動線を考慮した構内の数箇所での立・動哨警備を行っている。12年度は新校舎に移転し、校舎のセキュリティは高まったが、依然として周辺施設のセキュリティが高いとは言い難い。より安全で確実な防犯体制を構築していく必要性があろう。

本庄キャンパスには、大学の安全衛生委員会の下部組織として、本庄キャンパス安全衛生委員会が設置されており、本庄プロジェクト推進室長を委員長に、本学院を含むキャンパス内各箇所から委員が選出されている。委員会は毎月定例で開催され、キャンパス内の安全衛生全般について報告や確認を行なっているが、本学院教務主任・副主任もオブザーバーとして出席している。

③生徒進路

a. 進学学部

12年度は 309名が卒業し、全員が早稲田大学各学部に進学した。第1志望の学部・学科・専攻・専修に進学した者は 248名（80.3%）、第2志望までのそれに進学した者は 278名（89.7%）であった。各学部・学科・専攻・専修ごとの男女別の進学者数は、次の通りである。

学部	学科	専攻	専修	進学者数		
				男子	女子	合計
政治経済学部	政治学科			10	17	27
	経済学科			19	10	29
	国際政治経済学科			5	9	14
法学部				33	11	44
文化構想学部	文化構想学科			12	12	24
文学部	文学科			5	6	11
教育学部	教育学科	教育学専攻	教育学専修	1	1	2
			生涯教育学専修	0	1	1
			教育心理学専修	0	2	2

		初等教育学専攻		0	1	1
	国語国文学科			3	1	4
	英語英文学科			3	4	7
	社会科	地理歴史専修		6	0	6
		社会科学専修		3	0	3
	理学科	生物学専修		0	2	2
		地球科学専修		0	1	1
	数学科			1	0	1
	複合文化学科			1	0	1
商学部				20	9	29
基幹理工学部				20	4	24
創造理工学部	建築学科			6	0	6
	総合機械工学科			3	1	4
	経営システム工学科			4	1	5
	社会環境工学科			0	0	0
	環境資源工学科			1	0	1
先進理工学部	物理学科			3	0	3
	応用物理学科			4	1	5
	化学・生命化学科			2	1	3
	応用化学科			2	1	3
	生命医科学科			2	1	3
	電気・情報生命工学科			11	2	13
社会科学部	社会科学科			9	4	13
人間科学部	人間環境科学科			0	0	0
	健康福祉科学科			1	0	1
	人間情報科学科			0	0	0
スポーツ科学部	スポーツ科学科			3	0	3
国際教養学部	国際教養学科			5	8	13
合計				198	111	309

b. 他大学進学

12年度の卒業生には、他大学を受験した者はいなかった。

c. 退学

12年度中に1年生3名、2年生2名が、それぞれ一身上の都合により退学した。

IV. 研究活動

①教員の研究活動

a. 研究成果

個人による12年度の研究成果は次の通りである。

著書（単著）

『土器づくりからみた3つのアジア：エジプト・台湾・バングラデシュ』

創成社 12年6月

『五胡十六国－中国史上の民族大移動』新訂版

東方書店 12年10月

『完全攻略 化学オリンピック』第2版

日本評論社 13年2月

著書（分担執筆）

『中世詩歌の本質と連関 中世文学と隣接諸学6』

竹林舎 12年4月

『映画英語授業デザイン集』

フォーインスクリーンプレイ事業部 12年5月

『実践国語科教育法「楽しく、力のつく」授業の創造』

学文社 12年9月

- 『第1回映画英語アカデミー賞』 フォーインスクリーンプレイ事業部 12年9月
『うつほ物語大事典』 勉誠出版 13年3月
- 論文（単著）
「従画像磚看高台魏晋墓的特性」 『高台魏晋墓与河西歴史文化研究』 12年4月
「学習院大学文学部日本語日本文学科所蔵『栄花物語』の本文—その性格と価値—」
『中古文学』89 12年6月
「“十六国”与烏桓—特別以烏桓与三燕的關係為中心」
『中国魏晋南北朝史学会第十届年会暨国際學術研討会論文集』 12年8月
「他メディア化する有島武郎作品
—奥秀太郎監督映画「カインの末裔」・「ドモ又の死」考—」
『有島武郎研究有島武郎研究』15 12年9月
「英語で読む数学—英語I・数学I コラボレーション授業 講義ノート—」
『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』31 13年3月
「高等学校の生徒寮における安全配慮義務」
『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』31 13年3月
「学校教育との連携による総合型地域スポーツクラブの運営・実践研究」
『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』31 13年3月
- 論文（共著）
「Interference Pattern Formation between Bounded-Solitons and Radiation in
Momentum Space: Possible Detection of Radiation from Boundet-Solitons
with Bose-Einstein Condensate of Neutral Atoms」
『Journal of Physical Society of Japan』 12年9月
- 翻刻注釈（共著）
「『四条宮下野集』研究」（二） 『鳳翔学叢』9 13年3月
- コンサート
第9回「歌の缶詰コンサート」 音楽グループ「歌缶詰」主催 12年7月
歌と建築による「構響楽コンサート」 12年12月
- 講演
「Bose凝縮体ソリトン束縛状態と輻射成分との運動量空間における干渉について」
京都大学基礎物理学研究所研究会「熱場の量子論とその応用」 12年8月
「Cooperation and collaboration through research activities」
第1回「21世紀の中高生のための国際科学技術フォーラム」教員セッション
12年8月
- 口頭発表
「数学を英語で触れる試み—SSHと「数学のよさ」を鑑みて—」
日本数学教育学会第94回全国算数・数学教育研究(福岡)大会 12年8月
「Facebookを使ったプロジェクト型国際協同学習」 田辺英語教育研究会 12年5月
- その他
取材協力
佐藤清孝「有島武郎の未公開書簡 未完小説『星座』に触れる」
『朝日新聞』ちば首都圏版朝刊 13年1月
- 論文のうち2件は国外での発表である。11年度に比して、著書（単著）が2件増加、著書（分担執筆）が5件増加、講演と口頭発表があわせて1件増加し、翻刻注釈の成果が新たに加わった。著書（共編）・論文（共著）・学会ポスターは減少したが、全体としては数的には増加している。
- b. 学内研究費による研究
早稲田大学特定課題研究助成費を獲得した研究は次の通りである。
特定課題研究助成費B
「学校教育との連携による総合型地域スポーツクラブにおけるスポーツ指導法の研

究」	200千円
「鮮卑慕容部の形成と拓跋部との関係」	250千円
特定課題研究助成費（新任の教員等）	
「中国に流出した日本古典籍の書誌学的研究—平安期の文学作品を中心に—」	270千円

大学の制度の変更により金額は減少したが、件数は1件増加した。

V. 教育研究施設

①新校舎

新校舎内の教室・保健室・教務室・入試作業室、および複数の面談室が拡充されたことで、教職員は便利さを感じることができた。各教室のIT設備は充実し、授業だけではなく課外活動でも活用された。定期試験時の教室割りでは、クラス分割がほぼなくなった。英語のリスニングテストでもストレスなく実施できている。全館の換気、教室からの騒音・採光、食堂内や周辺の動線等はほぼ問題はない。クラス固定教室扱いは1年生のみだが、教室と設備が均等化されたため教室移動が減り、2、3年生でもLHR教室で放課後の時間を過ごす生徒を多く見かけるようになった。食堂はラウンジ的にも使用されている。

下校のスクールバスを待つ列は校舎内にも及ぶが、登下校時の生徒の動線はスムーズと言ってよいであろう。ただし緊急時の避難経路（特に西側奥の上階の施設）はさらに注意をほらいたい。体育で屋外の運動施設を使う際は近接したので時間が短縮できた。また保健室が拡充し、屋外でのけが人などの対応はスムーズになった。

計画時に教室の充実を最優先としたため、事務所・会議室・教科教員室・生徒用のフリースペース（部室・自修室・生徒会室等）が手狭になり、不便な面も出ている。旧校舎中庭の代替をイメージして作られた中央ラウンジは活用されていない。また部屋と動線が変化することで、特定の教科の教員とあまり顔を合わせないという事象も起こっている。教育プログラムの成果展示やラウンジ部分の柔軟な活用など、新校舎の特長を生かす工夫が必要と考えられる。

学院体育館・共通教室棟体育館・大教室を継続して使用せざるを得ないことによる、授業や集会時の負担は大きい。音楽の授業とブラスバンド部の活動も毎回の移動を含んで行なわざるを得なかった。

校舎移転と使用開始から1年が過ぎ、長所も短所も見えてきた感がある。新校舎の活用方法のさらなる検討と、今後の施設計画へ向けての学院内や大学本部とのやりとりを前向きに検討していきたい。

②学内施設

a. 教室

新校舎に移転した結果、教室は普通教室23、ゼミ室4、理科実験・講義室5、情報処理室2、美術室1、体育講義室2、地理演習室1、音楽教室1、家庭科調理室1、メディアルーム1、CALL教室1、大教室1で構成されることになった。各教室にはIT機器とスクリーンが設置され、11年度より機能は飛躍的に向上した。

b. CALL教室

新校舎建設に伴い、最新のCALL（Computer Assisted Language Learning の略、コンピュータを使って語学学習を支援するシステム）システムを搭載した教室が新たに設置された。CALL教室では、①対話形式での学習時に、各ディスプレイの上に設置されているカメラとマイク付きヘッドホンを利用して、相手の表情を確認しながら対話練習すること、②インターネットを活用し、教室にいながらにして教材を広く世界中に求めること、③音声や映像を各自のコンピュータに送り、自由に活用すること、④配布された教材を持ち帰り、自宅で復習や予習すること等が可能になった。

c. コンピューター・インターネット環境

PC室が2室設備され、また各教科教員室に大学側から各教員に貸与されたノートPCが設置された。PC室は情報科授業・選択授業はもとより、他の授業でも担当教員が必要と思われる際には使用することができる。また放課後は生徒の研究活動のために開放されている。本学院と大学キャンパスは専用線で結ばれており、校内3か所には無線LANのポイントが置かれ、モバイル的使用上、帯域幅的にネット上のストレスはない環境にある。

e. 体育施設

○学院体育館

新校舎は完成したものの新体育館は建設されず、学院体育館への生徒の移転は坂を上っていかなければならなくなり、11年度までよりも大幅に時間がかかるようになった。生徒と体育科教員が連絡を取りやすくするために体育科教員室を共通教室棟へ移動したが、それでも移動距離が大きくなり、連絡が取りにくい状況はあまり改善されていない。学院体育館は授業をする上ではフロア面積が狭く、雨天の際に複数クラスで授業することが困難である。早急な新体育館建設が必要である。なお雨漏り防止の工事が行なわれた。

○共通教室棟体育館

11年度までは教員室がなく、放課後等の管理に安全面の問題があったが、体育科教員室の移転によってそれは改善された。学院体育館よりも新校舎に近く、11年度までより利用価値は高まった。男女更衣室が2階にあるが、体育の授業よりもクラブ活動の生徒の利用が多い。

○サッカー場

十分な広さがあり、それを活かした授業展開ができた。整備・維持活動も的確に行なわれた。3月の時点で倉庫およびひさしの工事が行なわれており、トイレの新設も含めて13年度からはより整備が進むであろう。

○ラグビー場・陸上競技場

十分な広さがあり、それを活かした授業展開ができた。時間割りの関係で、ハンドボールとソフトボールの授業も行なえるように整備した。

○野球場

十分な広さがあり、それを活かした授業展開ができた。整備・維持活動も的確に行なわれた。

○テニスコート

テニスコート6面（クレイ4面・オムニ2面）は新校舎からは近くなり、生徒の移動は楽になった。

○部室棟・トレーニングルーム

新校舎建設により、部室棟・トレーニングルームは校舎の玄関近くに位置することとなった。これまで以上に各クラブの清掃・整理が徹底されなければならないであろう。

○屋外施設全般

屋外施設は新校舎建設により、校舎からの移動距離は全般的に近くなったが、逆に泥のついたままの靴で校舎に入ることも多くなった。13年4月にサッカーグラウンドのトイレが新設されることで改善される部分もあるが、新校舎を美しく保つ上でも今後も工夫が必要である。

g. 図書室

図書室は新校舎へ移転をしなかったため、施設面での大きな変更は生じていない。旧校舎に置かれていた「自修室」の図書室機能を図書室に吸収したことで若干手狭になったが、コンパクトな配置で対応している。

一方、新校舎から図書室入口への距離が長くなったため、利用者が図書室西側の林の中を横切っており、季節によってはスズメバチやマムシなど危険が憂慮される。アプローチ部分の早急な改善が必要である。

蔵書の管理では、管理者端末4台と利用者検索端末5台、Waseda-netを利用した外部からの検索などの環境を整えてある。その他、大学図書館蔵書用の管理者端末や利用者検索端末

が設置されており、「取り寄せ貸出」「どこでも返却」サービスによる大学図書館蔵書の利用も非常に活発である。

h. 保健室

新校舎への移転により保健室の状況も大きく変化した。まず保健室自体の面積が拡大し、11年度までのような混雑は緩和された。またグラウンドまでの距離が短くなったため、グラウンドでの怪我等に対する処置もスムーズに行なえるようになった。さらに段差が少なくなったことで車椅子は使用しやすくなった。

逆に共通教室棟・学院体育館・大教室からの距離は長くなり、そこでの怪我等に対する処置に時間を要するようになるという問題が新たに生じた。また本庄早稲田駅までの距離も長くなったため、軽度の体調不良者を1人で徒歩で帰宅させることも難しくなった。エレベーターは設置されたが担架が入らず、2階・3階で傷病者が発生した際には移送が困難である。相談室には窓がなく、床も黒いため閉鎖的な印象になっているが、これについては13年度に床に明るい色のカーペットを敷き、棚の高さを低くすることが予定されており、圧迫感は解消される見込みである。

なお新校舎移転当初、救急車やタクシーが校舎の入り口や保健室を把握できず問題であったが、2学期以降は改善された。

i. 食堂

食堂はホールとパンショップから構成されている。生徒の食堂利用時間は、主に10時50分から11時10分までのコーヒブレイクと13時から13時40分までの昼休みである。食堂の座席数は442であり、一時的な混雑は見られるものの、概ね問題はないと考えられる。また自動販売機3台、給茶機3台、食券販売機4台が設置されている。

食事時間以外には、学校説明会（個別相談）や学年集会など多様に利用することができ、また試験期間中等は生徒の自習スペースとしても非常に有効に機能している。

③校地

本庄キャンパスは本庄市郊外に位置する丘陵地の全体で、その面積は856,498㎡で、大学全体の敷地の45%を占める。キャンパスの北端に上越新幹線本庄早稲田駅があるが、12年度には駅前整備工事が進められ、南口ロータリーが完成し、校舎までの所要時間が13分に短縮された。

④スクールバス

朝日自動車株式会社に業務委託し、本庄駅・寄居駅と本学院を結ぶスクールバスを運行している。新校舎移転に伴い、バスの走行距離が延伸したため、朝のバスのダイヤがより過密になった。安全性を確保するためにも、バスの台数に余裕があることが望まれる。雨天の日等の本庄駅便には、乗車できずに始業時刻に遅れる生徒が多く出るという状況が慢性化した。一方寄居駅便は、ほぼ毎日定員（80人）いっぱいでの運行が続いており、約30分間満員状態の車内に閉じ込められていることに対する不満の声が上がっている。

⑤早苗寮

4月に新設された生徒寮（12月に鎌田総長により「早苗寮」と命名された）には、136名の定員に対し、129名の生徒が居住した。住み込みの寮長・寮母とこれを支える調理スタッフ・清掃スタッフが日常の管理・運営にあたり、教員は当番制による巡回指導と寮担任による寮班指導を行なった。特に年度当初においては全専任教員が1度ずつ宿直にあたり、深夜の巡回や朝の登校時指導なども行なった。

また寮生の学習面の指導も充実させるよう努めた。定期試験の直前は教員が寮を訪問して学習指導を重点的に行ない、寮の食堂を学習室として質問対応にあたったところ、熱心に学習する寮生が増加した。

日課、外泊や門限延長のルール等は、実際に運用が始まってから様々な点で見直しを迫ら

れたが、少しずつ整備を進めた。特に、クラブ活動に準ずるような習いごとや通塾・通院等のための門限延長は必要性が高いと認め、保護者からの申請と教務の承認により、22時までの延長を許可することとした。また、食事提供のない日曜日・祝日の門限も22時とした。こうした措置により寮生の不満も軽減されたようである。寮開設前は門限違反が多発することが心配されたが、実際には数件にとどまり、指導を受けた後の再度の違反はなかった。日課に関する生活指導については十分な成果があったと考えられるが、起床時刻が守れずに朝食を摂れなかったり、遅刻が目立つ寮生がいることなどの課題は残っている。

生活上のマナーについて特に大きな問題となったのはゴミの分別であったが、寮生集会を開いて指導や呼びかけを行なったことと、各フロアに分別用のゴミ箱を設置したことで改善がみられた。

委託ホーム行事に代わる寮行事として、寮自治会（リーダー会議）からの提案により、ボウリング大会とクリスマスビンゴパーティを実施した。いずれも、寮生の代表者による企画と運営により実施され、多くの寮生が参加して楽しむことができた。また稲稜祭では、寮生によるフリーマーケットを出店し、売上金30,892円は東日本大震災復興支援のための寄付に充てた。

9月には防災訓練を実施し、避難経路と集合地点の確認を行なった。

運営面に関しては、事業者の早稲田大学プロパティマネジメント、管理会社の共立メンテナンスとの三者会議を定期的で開催して協議を行ない、寮生からの要望が多かった食事のボリュームの改善、寮生活・契約についての手引きとなる『早苗寮ガイドブック』の編集などが実現した。また、年間を通して懸案事項となっていた常駐係員（調理人）が3月15日に着任し、寮長・寮母と常時3人体制がようやく実現した。保護者への連絡としては、一斉メールによる『早苗寮通信』を不定期に配信したほか、寮生保護者会を2回開催した。

以上のように、様々な試行錯誤を繰り返しつつも、全体としては安定した寮運営の基盤が確立されてきたものと評価できる。

一方、寮生の募集のあり方については課題を残した。開設時に男子は満室で、うち年度末での退寮予定者（3年生）が24名にとどまったことから、13年度の募集も当初24室として広報せざるを得なかった。このことは入学説明会等でも多くの関心を集め、希望しても入寮できない可能性があるのではないかという懸念を持たれた。しかし実際には1・2年生からも契約を更新せず年度末で退寮する者が出た等の事情により、最終的に男子37室、女子9室の募集が可能となったが、男子の新規入寮希望者は前年より大幅に減少し、13年度新1年生の入居者は27名にとどまった。特に埼玉県内からの入寮希望はいなかった。一方、女子は募集を上回る入寮希望があり、一部の自宅通学可能者に対して入寮を断らざるを得なかった。海外から保護者が帰国するなどの事情で途中退寮する寮生もあり、今後、年間を通じて安定した入居率を維持していくための寮生募集のあり方について検討する必要があると考えられる。

VI. 社会・大学との連携

①保護者との連携

a. 保護者の

12年度は6月9日（土）と12月16日（日）に保護者会を開催した。全体会・クラス別懇談会・個人面談という構成で行なわれ、6月の保護者会では全体会ののち、初めて生徒寮保護者会が実施し、2回の保護者会とも9割前後の保護者が参加し、関心の強さが窺えた。両保護者会で、保護者アンケートを実施し、本学院に対する保護者からの意見を聞いたが、6月には36件、12月には9件のアンケート用紙の記入があった。

b. 後援会

卒業生の保護者によって組織されている後援会は、「早稲田大学本庄高等学院保護者の会と連携し、早稲田大学本庄高等学院の教育活動の振興を支援するとともに、会員相互の親睦を図ることを目的」に活動を行ってきたが、12年度をもって解散することになった。なお解散に際し、本学院創立30周年記念教育環境整備・充実事業募金に1,273,566円の寄附を行なった。

②卒業生との連携

a. 同窓会

同窓会との関係は良好である。年数回行なわれている同窓会役員会には本学院同窓会委員会の委員長及び委員が出席し、一方、卒業式などの本学院の行事には同窓会会長を招いている。10月13日に創立30周年記念式典は同窓会の全面的な協力によって実現した。

今後は同窓会との関係をさらに強化し、教育支援の募金等を推進することによって、本学院の教育活動を充実することが求められていると言えよう。

b. ウィンターセミナー

本学院卒業生等を講師に招いて12月8日(土)に実施した。卒業生による6つの講義と資格系予備校が主催する2つの講義を行なった。当日の各講義の運営は、1年生の世論・広報委員の生徒が担当した。

参加者数は1年生102名、2年生48名、3年生32名で、全般的に2、3年生の参加が少なく、1年生の参加によって受講者を確保できた講義が多かった。2、3年生への本セミナー参加への動機付けが求められる。公認会計士・弁護士・公務員などの資格の講座が3つになってしまったことは反省すべき点である。

講義終了後に行なわれた懇親会では、各講師から貴重な意見を受けることができた。

③地域との連携

a. 本庄稲作プロジェクト

12年度からの新たな試みとして「本庄高等学院稲作プロジェクト」を開始した。地元農家との交流を通じ、農業を取り巻く様々な事柄を体験的に学習し、地域との連携を図ることが目的である。農業を軸に多くの教科や科目が横断的に取り組むことのできる企画として、大いに期待できるものである。

12年度はプロジェクトの試行的な意味合いから、美里町農林課と稲作農家の協力のもとに、6月と9月に農業体験を企画した。第1回(6月)の企画は雨天のため中止となったが、第2回(9月)は、8名の生徒(3年生7名・1年生1名)が、美里町下児玉の水田で稲刈りを体験した。生徒たちは、最初は鎌を持つ手がぎこちなかったものの、徐々に慣れてくると、泥だらけになりながら、楽しそうに稲を刈り取っていた。

稲刈りを体験した後は近くの公民館に移動し、地元の農家の人たちを囲んでの座談会を行なった。ここでの話題は米作りのサイクルや農作業の苦労話のみならず、営農の専門的な内容や本学院周辺の昔の様子など多岐にわたり、生徒たちは非常に興味深い話を聞くことができた。後日、参加した生徒達が稲刈りを行なった水田で収穫された米が本学院に届けられた。このプロジェクトは、大学で行なわれている同様のイベントとの連携を図りながら、13年度も引き続き行なう予定である。

b. 施設の開放

セキュリティの関係から、校舎・体育館などの学外への貸与は行っていない。ただ本庄市との歴史的な関係から、例外的に、本庄市民や中学校の陸上競技大会に陸上競技場を貸与し、公益財団法人本庄早稲田国際リサーチパークと本庄市との連携事業である「こども大学ほんじょう」の修了式会場として大教室を開放した。また市民のウォーキングコースやクロスカントリー大会にも協力している。

④教員の社会活動

a. 学外委員・役員

自治体・団体等の役員

「日本英語検定協会」面接委員

「おおくぼ山スポーツクラブ」代表

「本庄市児玉郡合唱聯盟」顧問

市民総合大学「唱歌」講師 本庄市社会教育課主催
 本庄市立南公民館「唱歌」講師
 本庄市立西公民館「唱歌」講師
 音楽ぐるうぷ「歌囃缶」指導
 合唱団「北風」指揮者
 神川町唱歌童謡サークル「赤とんぼの会」講師
 研究会の役員
 「熱場の量子論とその応用」世話人

b. 学外講師・出張授業等

大学施設を使用しての学外者への講義

スポーツ指導研究会 おおくぼ山スポーツクラブ主催

少年野球交流 おおくぼ山スポーツクラブ主催

学外講演

「世界オモシロ健康法」	埼玉県立総合スポーツセンター	12年6月
「教育場面に生かせる健康運動」	埼玉県教育センター	12年8月
「ウォーキングとジャグリングで健康に」	神奈川県立体育センター	13年1月
「身近なもので風力発電を体験しよう」	本庄市中央公民館親子で楽しむ理科教室	12年8月
「身近なもので風力発電を体験しよう」	中之条町立六合公民館六合小放課後子ども教室	12年12月

⑤教科書等の編集・執筆

a. 教科書の編集・執筆（分担）

『Polestar English Communication I』	数研出版	13年1月
『SCREENPLAY English Expression I』	フォーインスクリーンプレイ事業部	13年1月
『新編国語総合』	東京書籍	13年3月
『精選国語総合』	東京書籍	13年3月
『国語総合』	東京書籍	13年3月
『精選現代文』	東京書籍	13年3月
『現代文』	東京書籍	13年3月
『精選古典』	東京書籍	13年3月
『古典』	東京書籍	13年3月

13年度から教科課程が変更されることから、12年度は多くの教員が教科書の編集・執筆に関わった。

b. 指導書・参考書の執筆（分担）

『TEACHER'S MANUAL for SCREENPLAY English Expression I』	フォーインスクリーンプレイ事業部	13年2月
『Student's Workbook for SCREENPLAY English Expression I』	フォーインスクリーンプレイ事業部	13年3月

⑥外部資金の導入

a. SSH（スーパーサイエンスハイスクール）

基礎枠事業費 9,000千円

11年度よりコアSSH事業費（20,000千円）の分が減少となった。

b. 科学研究費補助金

奨励研究

「南アジアにおける東南アジア系先住民・サンタルに関する比較民族誌的研究」

400千円

12年度科学研究費補助金の応募は3件であり、そのうち次の1件が採択された。11年度に比して、件数は同じ、金額は100千円の増額となった。

c. その他

パナソニック教育財団第38回実践研究助成

「9年間の交流校（インドネシア）と作り続ける国際フリーペーパー—IT環境を活用したプロジェクト型国際協同学習経験の発展的循環を検証し促進する—」 500千円

⑦大学教育との連携

a. 教育実習

12年度は2週間（5月28日～6月8日）の実習生を4名、3週間（5月28日～6月13日）の実習生を13名受け入れた。実習に先立って打ち合わせ会を行ない、実習期間の初日にはオリエンテーションを実施し実習がスムーズに行なわれるように配慮した。実習生には、教壇実習にとどまらず、体育祭の準備や当日の運営など、広い教育活動の一端を経験してもらった。また実習生は、教壇実習に支障のない範囲で、放課後の課外活動にも積極的に参加し、充実した実習をすることができたと思われる。

b. 学部・大学院授業の担当

学部・大学院の授業担当者は次の通りである。

文学学術院	1名
教育・総合科学学術院	4名
スポーツ科学学術院	1名

c. その他

教員1名が大学体操部監督を務めた。

VII. 管理運営

①教員組織

a. 教諭会

12年度は定例教諭会が11回（入試判定会、卒業・進級判定会は除く）、臨時教諭会が21回開催された。21回の臨時教諭会の中には生徒指導を議題とする会議が13回含まれる。12年度は、生徒指導を議題とする臨時教諭会の開催が、前年度より6回増加した。

また会議時間の短縮化を図ったが、これは概ね達成できたと思われる。

b. 委員会

12年度は、「新校舎検討委員会」を「施設検討委員会」に名称を変更し、本学院の施設全般を検討することにした。また生徒寮開設に伴い、「ホーム委員会」に替わって「寮委員会」を新設し、寮の運営をサポートすることにした。委員会の数は11年度と同じ14であった。各委員会が1年間を通じてそれぞれの役務を果たしたと評価できるが、特にSSH委員会は、中間評価で指摘された事項に対する改善策作成が大きな仕事となった。

各委員会の検討事項及び取り組みの主なものは次のとおりである。

○教科主任会

予算案作成、本庄高等学院将来構想、卒業論文・進学基準等の検討、指導要録の電子化に向けての取り組み。

○学年主任会

奨学生の選考、生徒表彰の選考。

○生徒指導委員会（兼人権教育委員会）

日常生活指導、学校における安全・安心確保への取り組み、人権教育の実施、人権教育の実践報告。

- 寮委員会
生徒寮の生活指導、寮規則の検討。
- 広報・出版委員会
『杜』・『研究紀要』の編集刊行。
- 情報管理委員会
情報の全般的管理、授業評価の実施。
- 入試検討委員会
『学院案内』の入試部分の作成、指定校の決定、 α ポイントの部分的見直し、学校説明会における個別相談の実施、各種入試説明会への参加、入試要項の作成。
- 施設検討委員会
交流ラウンジの使い方の検討、倉庫の割り当て。
- 進路指導委員会
各種セミナーの立案及び実施、卒論報告会の準備及び実施、学部説明会の検討。
- 学校行事運営委員会
体育祭・稲稜祭の立案及び運営、芸術鑑賞会の検討。
- SSH委員会
SSH事業の立案及び実施、課外講義の実施、各種コンテスト・調査旅行への生徒引率、SSH報告会の立案及び実施、文部科学省への年度末（中間）報告。
- 国内外交流委員会
Northside College Preparatory High School（シカゴ）・NJC来校時の対応、留学生の受け入れ検討、各種プログラムの引率。
- 学校評価運営委員会
学校評価の立案、実施依頼、報告書の作成。
- 募金委員会・同窓会
「30周年記念教育環境整備・充実募金」の企画と募金活動、同窓会活動への参加と協力。

c. 教員構成

教員の教科別・年齢別・男女別構成は次の通りである。11年度から大きな変動はない。

教科別構成

教科	専任教諭	非常勤講師	合計
国語科	6	6	12
地理歴史・公民科	7	15	22
理科	6	8	14
数学科	6	6	12
保健体育科	5	3	8
芸術科	2	0	2
英語科	8	5	13
情報科	1	4	5
家庭科	1	1	2
第二外国語	0	5	5
人間科学	0	2	2
養護	1	0	1
合計	43	55	98

年齢別構成

資格	人数	21～30歳		31～40歳		41～50歳		51～60歳		61～70歳	
		人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率
専任教諭	43	3	7%	11	26%	7	16%	13	30%	9	21%
非常勤講師	55	27	49%	10	18%	8	15%	6	11%	4	7%
全体	98	30	32%	21	21%	15	15%	19	19%	13	13%

男女別構成

資格	人数	男		女	
		人数	比率	人数	比率
専任教諭	43	36	84%	7	16%
非常勤講師	55	40	73%	15	27%
全体	98	76	78%	22	22%

d. 教員の持ち時間数

12年度の教員の平均授業担当時間数は次の通りである。11年度から大きな変動はない。

専任教員	14.4時間（長期欠勤者は除く）
役職者以外	15.3時間
役職者（教務）	5.8時間
非常勤講師	6.3時間

②事務組織

事務職員の担当別人数は次の通りである。新校舎移転に伴って自修室が廃止されたことで派遣職員が3名減少し、逆にメディアルームが新設されて派遣職員が1名増加した。その他は11年度と大きな相違はない。事務組織としての職員の配置数は十分といえる。

事務所	12名
事務長	1名
教務係	6名（専任職員4名・派遣2名）
庶務係	5名（専任職員2名・嘱託1名・派遣2名）
図書室	3名（専任職員1名・派遣3名）
理科準備室	2名
物理・生物	1名（派遣）
地学・化学	1名（嘱託）
メディアルーム	1名（派遣）

VIII. 創立30周年記念事業

①式典

10月13日に、本庄市民文化会館で創立30周年記念式典を行なった。大学理事・歴代学院長、退職教職員・旧委託ホームホスト等の来賓をはじめ、約1200名が出席した。第一期生の白井燿氏の記念講演、卒業生5名によるパネルディスカッションが行なわれ。午後には、新校舎のお披露目も兼ねて、新校舎食堂で祝賀会・委託ホームホストに対する感謝の集い・ホームカミングデーを開催した。200名以上の出席者があり、盛会であった。

②募金

本学院創立30周年記念教育研究整備・充実事業募金は、本学院の施設整備・充実のために10年4月1日から15年3月31日まで期間、5億円を目標に、法人・企業、卒業生・父母その他ご賛同いただける一般の篤志家、ならびに教職員を対象に募集中である。いまだに目標額には程遠く、一層積極的な募金活動を行なう必要がある。